

第26回ドイツ語教授法ゼミナール報告 (A. Kamei) [J]

第26回ドイツ語教授法ゼミナールは、2022年3月19日から22日まで4日間にわたって開催された。初日からの3日間は、多摩永山情報教育センター（東京都多摩市）において対面形式で、そして、最終日は、全員がオンラインで参加するという二部形式で行われた。

招聘講師である、ボーフム大学 (Universität Bochum) の Karin Kleppin 教授（以下「Prof. Kleppin」と表記）は、新型コロナウイルスの新たな変異株の世界的な感染拡大により来日が困難となったため、プログラムの一部（講演、ディスカッション）に、ドイツからオンラインでの参加となった。

Prof. Kleppin の専門分野は、ドイツ語教育、カリキュラム開発、学習評価、試験およびテスト開発である。教授は、外国語教育におけるテスト考案の分野においての第一人者であり、試験作成に関する研修やセミナーをさまざまな国で実施し、教員養成にも力を注いでいる。また、TestDaF の考案に参加されているほか、長年、ベルリン・フンボルト大学の教育品質改善研究所 (Institut zur Qualitätsentwicklung im Bildungswesen an der Humboldt Universität zu Berlin) と協同して、テスト問題の開発研究にも携わってこられた。

ゼミナールのテーマおよび参加者は以下の通りである。

総合テーマ：「試験・テスト・評価-実践と研究の試み」(Prüfen, Testen, Evaluieren – Ansätze für Praxis und Forschung)

参加者：*Cezar Constantinescu (明治学院大学)、**Olga Czyzak (麗澤大学)、Regine Dieth (同志社大学)、David Fujisawa (獨協大学)、Martina Gunske von Kölln (福島大学)、Anja Hopf (新潟大学)、堀口順子 (九州大学)、亀井明子 (奈良女子大学)、Ruben Kuklinski (東京大学)、草本晶 (麗澤大学)、Angela Lipsky (上智大学)、*村元麻衣 (名古屋大学)、*Frank Nickel (帝京大学)、Oliver Phan-Müller (Goethe-Institut)、齋藤正樹 (早稲田大学)、*坂本真一 (立教大学)、*Manuela Sato-Prinz (DAAD Tokyo)、Maria Gabriela Schmidt (日本大学)、Marco Schulze (中京大学)、Christian Steger (獨協大学)、*武井佑介 (立命館大学)、Bertlinde Vögel (大阪大学)、Eva Wölbling (東京芸術大学)、Nancy Yanagita (上智大学)、(アルファベット順、**実行委員長、*実行委員)

第 26 回ドイツ語教授法ゼミナールプログラム

	19.03	20.03	21.03	22.03
Vormittag		Gruppenarbeit / Workshop	Gruppenarbeit / Workshop	(via Zoom) Eigene Aufgaben erstellen / Präsentationen und Empfehlungen
		Teilnehmendenvortrag	Zwischenfazit	
Nachmittag	Anreise	Teilnehmendenvortrag	Abreise	
		Austausch für Kooperation		
	Vortrag I und Diskussion zu Vortrag I	Vortrag II und Diskussion zu Vortrag II		
	Vorbereitung der Gruppenarbeitsphase	Vorbereitung der Gruppenarbeitsphase		
Abend	Aufwärmphase	Zeit zum kollegialen Austausch		

1. 招待講師による講演とワークショップ

Prof. Kleppin による講演は、4 日間で計 2 回行われた。講演は、前述の理由により、Zoom を用いて会場で視聴する形式が採られた。講演中に提示された課題に対するディスカッションも同時に行われ、その時間は、各回とも 3 時間（計 6 時間）に及んだ。

試験あるいはテスト（「試験」と「テスト」は同義）は、外国語教育においても欠かすことのできないものである。なぜなら、それらは、学習の進捗や定着度の確認や測定を通じて、学校教育全般における成績評価の土台を形成しているからである。適切な試験問題を作成することは、教師の重要な役割のひとつとなっている。しかしながら、個々人の言語能力を、一体どの程度まで正確に測ることが可能なのか。また、特定の学習者層にとって意義のある

テスト形式とはどのようなものなのか。あるいは、試験そのものを評価する手立てとは何であろうか。

こうした疑問から、本講演は、掲げられたテーマである「試験・テスト・評価」に従って進められた。前半では、試験・テスト・評価の領域を巡る基礎的な知識に重点が置かれ、後半では、言語能力の測定に適した独自の試験問題を作るために必要な手順が語られた。

なお、Prof. Kleppin によって提示されたワークショップの内容は、前日の教授の講演内容と対を成したものとなっている。

【講演 1】

講演は、試験・テスト・評価の領域に関わる基礎知識の獲得から始められた。

TestDaf や Goethe-Institut による検定試験といったドイツ語能力試験のみならず、大学等で実施される定期試験、授業中の小テストに至るまで、試験あるいはテストには、それぞれの目的と用途が設定されている。試験を実施する際、教員には、それら用途に応じて実施方法、形式や構成、評価の種類を使い分ける能力が求められる。併せて、試験問題の信頼性や妥当性といった試験の有用性についても検討されねばならない。また、どのような形式であっても、試験というものは、学習者には否が応でも何らかの影響を与えるものである。そのため、極力、ネガティブな影響を抑え、学習そのものに対するポジティブな影響を引き出すことが重要であり、それには、試験を言語行為中心的 (*handlungsorientiert*) に行う必要がある。言語行為中心のおよび能力中心的 (*handlungs- und kompetenzenorientiert*) な形式の試験作成においては、その中で使用される素材や場面に、学習者が実生活で直面する言語使用状況がどれだけ反映されているかが問われることとなる。

この講演中にはグループで取り組む課題も出されたが、そこでは、対象となる学習者にとって重要で、しかも、可能な限り自然であるような文脈での言語的活動を測る設定が検討され、活発に意見が交わされた。さらに、実際に使用されている言語能力試験や、それに関連した練習問題などについて、それらが言語能力の測定を目的としていながら、しかも、どのように言語行為中心的でもあり得ているかが分析・検証された。

【ワークショップ 1】

前半は、前日の講演 1 の内容をどの程度理解しているかについて、参加者がペアを組んで、それぞれインタビュー形式による口頭試験によってチェックし合った。その際、理解内容を確認するのみならず、インタビューを取り入れた口頭試験という形式を用いた場合に、それが学習者にどのような影響を与えるかについても観察するよう求められた。この点については、口頭試験が学習者にもたらす心理的な側面や、試験内容の真正性 (*Authentizität*) に関する指摘があった。

それに続いて、講演で扱われた様々な試験形式の内、参加者が、今後、自身が作成する試験に使用したいものを挙げ、その目的や理由、予想される学習者の反応などを、6つのグル

ープに分かれて話し合った。それらの内容は、グループ毎に Moodle に入力されることで、相互に参照し合える発表となった。

【講演 2】

2 日目の午後の講演では、講演 1 の内容を踏まえ、良質な試験問題を作成するための手順について、試験の設計、実施から採点、評価に至るまでの一連の流れが考察された。妥当性を考慮した、信頼性の高い、言語行為中心的な試験を、参加者が作成できるようになるために、講演中には、さまざまな方法による実例が提示された。前日と同様に、それらの実例はグループで論議され、検討が加えられた。

試験問題を作成する際には、学習者の習熟度レベルを客観的に記述し、個々の学習段階で測定可能な一貫性のある評価基準を定める必要がある。しかし、その基準は、学習者の到達度・達成度を評価するためのツールとしてのみ使用されるべきではない。それは同時に、学習者の学習プロセスをも評価するものでなくてはならない。つまり、評価そのものの意義だけでなく、学習者にさらなる学習を促す仕組みが、試験実施の一連の流れの中に組み込まれている必要がある。教員には、それ故、評価基準を明確に打ち出すにとどまらず、その基準を学習者の学習活動における関わりの中でどのように活用していくかが求められている。

【ワークショップ 2】

3 日目となるワークショップ 2 もグループワーク形式で行われた。„Wie erstellt man gute Aufgabe?“ をテーマに、実際に試験問題を作成した。作成にあたり、まずは各グループ内で方向性を定めることが求められた。ここでは、試験問題を完成させることではなく、その作成の過程がより重要であった。

【プレゼンテーション】

最終日は、Zoom によるオンライン形式で行われた。前日のワークショップ 2 で作成した課題をあらかじめ Moodle に掲示し、それに基づいてグループ毎にプレゼンテーションを行った。それぞれに実践的な試験問題を作り上げることができた。その後、プレゼンテーションの内容に関して、またさらに、これまでのゼミナールの内容全体に対して、参加者全員による意見交換や振り返りがなされた。

2. 参加者による発表

2 日目の午前と午後に、参加者による発表が行われた。発表のタイトルは、発表順に以下の通りである。

- Maria Gabriela Schmidt: Formatives Assessment im Deutsch-als-Fremdsprache-Kontext in Japan
- Nancy Yanagita: Portfolioarbeit bewerten – Ja? Aber wie?
- Oliver Phan-Müller: Deutsch Lehren Lernen (DLL) – Das Fort- und Weiterbildungsprogramm des

Goethe-Instituts am Beispiel DLL 7: Prüfen, Testen, Evaluieren (発表順)

また、2日目午後には参加者が関心のある研究テーマについて、共同研究者を募る機会も設けられた。今回提案されたテーマは „Ein Kurskonzept zur Einführung in wissenschaftliches Präsentieren und Schreiben auf A2 bis B1“と „Task-Based Learning (TBL) im Unterricht und am Semesterende die Benotung / Bewertung der Studierenden“であった。

3. 総括

3年振りに対面での開催となった、今回のドイツ語教授法ゼミナールでは、Prof. Kleppinの講演をベースとして、講演中に提示されたグループワークやその後のワークショップにおいて、良質な言語テストを作成するために意識すべき点について、さまざまな角度から俯瞰する機会を得ることができた。小テストから学期末試験、語学検定試験に至るまで、言語教育においては、試験の実施と評価が一体を成して、核となっていることを再認識させられた。また、評価において明確な基準を示すことが、学習者の自律的な学びへと繋がるという点についても実感させられた。それ故、このゼミナールで得た知識や経験が、実際の試験作成のみならず、今後のより良い授業作りの基盤になるであろうことは言うまでもない。

本ゼミナールでは、冒頭に述べたように、Prof. Kleppinの来日を、残念ながら実現できなかったものの、Prof. Kleppinと参加者との間の質疑応答やディスカッションは十分に行われ、その効果においては、対面での場合と比べても何ら遜色がなかったと言える。なお、セミナー会場では検温や消毒など、開催にあたってのコロナ対策には万全の対策がとられていた。

最後に、ゼミナール実施にあたり、例年同様、ドイツ学術交流会 (DAAD)、日本独文学会、Goethe-Institut から多大なご支援を頂戴したことに対し、この場を借りて、あらためてお礼を申し上げたい。

亀井 明子 (奈良女子大学)

0188

作成日 : 2022/07/08